

過程と発生を捉える TEA（複線径路・等至性アプローチ）

—不定とともにある実存を探究する、人間科学の質的研究法

TEA (Trajectory Equifinality Approach) for grasping process and generation: Qualitative research method of human science which inquires existence with uncertainty

安田裕子（立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員）

サトウタツヤ（立命館大学文学部 教授）

福田茉莉（立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員）

木戸彩恵（立命館大学立命館グローバル・イノベーション機構 専門研究員）

質的研究の対象を「経験・現象」とすれば、そのメカニズムを把握するか、もしくはプロセスを捉えるかで、目的及び用いる手法が大きく分かれる。また、観察であれ聴きとりであれ、認識された諸事象を捉えるか、それらに通底する何らかを洞察するかという観点によっても、その手法は二分されよう。

質的研究法の理論的整理を行ううえで、「経験・現象」を中心におき、「構造・機能」と「過程・発生」を両極とする軸を設定し、また、それに直交するかたちで「実存」と「本質」を両極とする軸を構成した。そして、各質的研究法を4象限に配置・整理した。

その結果として明らかにした配置図は当日の報告で提示するが、複線径路・等至性アプローチ（TEA）は、「実存」の「過程・発生」を捉え、「個別性」を探究するのに有用な方法論として理解することができる。人は、今後を知りえない非可逆的時間とともに生きる存在なのであり、その行動選択の様相、すなわち実存は、実現し得なかつたいまだない可能世界とともに把握することが重要である。TEAは、そうした人の生が成りゆくリアルな様相を捉えるのに有用な方法論であるといえる。

（「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連環型研究」方法論チーム）